

“但馬牛”今昔物語

兵庫県立但馬牧場公園 「但馬牛博物館」

館長 渡邊 大直

第5回「但馬牛の流通ルートの成立と神戸ビーフの誕生」

江戸時代に、養父市場を出発点とする但馬牛の流通ルートができました。

この時代、博労に雇われた“牛追い”と呼ばれる人が数頭の子牛を繋いで、徒歩で輸送し、牛追いが牛と泊まる牛舎を備えた旅籠を“牛宿”といいました。岸政一氏は牛宿を調査し、「但馬牛の旅」にまとめられています。以下これに基づいて江戸時代の但馬牛流通ルートを辿ります。

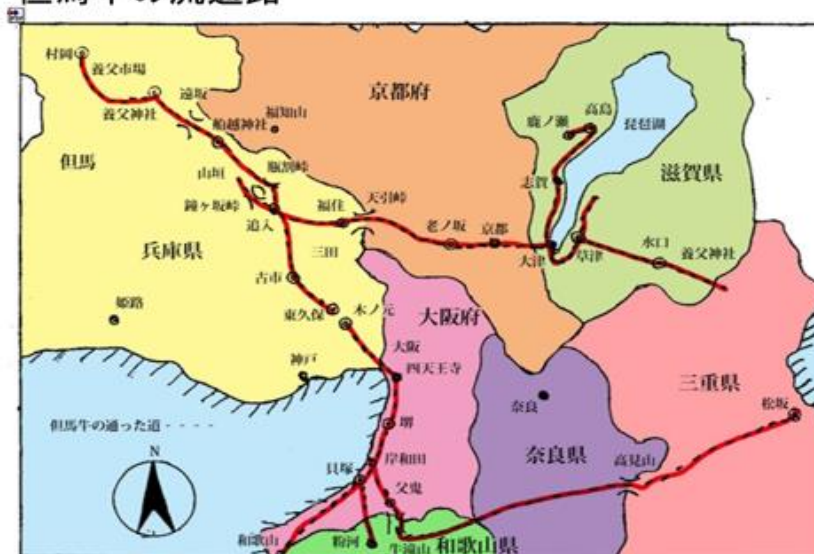
「養父市史」によると、養父市場周辺には博労宿や牛宿が並び、市の日ともなると、牛を売りに来た人、買いに来た人、見物に来た人で溢れ、物売りも出てたいそう賑わいました。ここで競り落とされると、子牛の牛追い道中が始まります。

和田山、梁瀬を抜け、遠阪峠を越えて、今の丹波市青垣町山垣^{やまがい ならじ}の平地が最初の宿泊地です。

寛政年間（1789～1801年）の「丹波志」に、ここに牛宿が3軒あって、但馬から来た牛が泊まります。次の牛宿は多紀郡大山新田とあり、江戸中期には既に牛宿が存在しました。

今の篠山市には“大山新”という地名がありますが、これより鐘が坂に近いところに追入^{おいれ}という集落があります。ここは宿場町で牛宿も3軒ありました。養父市場から平地までと、平地から瓶割峠^{かめわりとうげ}を超えて追入まではほぼ同じ距離で、6里（24 km）が一日の行程だったようです。

但馬牛の流通路



岸政一「但馬牛の旅」より

また、追入は京都方面と大阪方面に向かう道の分岐点でもありました。

京都方面に向かうには、現篠山市福住の牛宿に泊まり、^{あまびき}天引峠を越えて、亀岡市の老ノ坂にある牛宿を目指しました。

大阪方面へは、古市（篠山市波賀野新田）の牛宿に泊まり、次いで西宮市塩瀬東久保、木ノ元の牛宿に泊まりました。

福住、古市に牛宿は1軒しかなく、東久保、木ノ元には普通の旅籠が牛小屋を備え、牛宿を兼ねるものが1軒ずつありました。

追入まで3軒あった牛宿が福住、古市には1軒に減り、東久保、木ノ元では規模が小さくなり、それから大阪まで牛宿はありません。

これは牛追い道中の子牛が徐々に減っているということを意味しています。

子牛の多くは大阪までは行かず、篠山、三田、有馬周辺の農家に預けられました。

この辺りには、農家が博労から子牛を預かって育成しながら、農耕に使い、厩肥を田に入れて米を作り、2～3年すると、博労が新しい子牛と交換する“^{いりまや}入厩”という習慣がありました。

和歌山にも似た習慣があって、買い入れた当歳雄牛を農耕に使いながら数年間育成し、成牛になると博労に販売したといえます。

また松阪辺りでは、作土が深く、農耕には力の強い牛が必要だったので、但馬の雌子牛を作土の浅い和歌山でならし、体格を作って導入したと伝えられています。

この様に江戸時代の牛のニーズは農耕で、即戦力の農耕牛とするため、仕入れた子牛を育成しなければならなかったのでしょう。東久保では、育成した牛を博労に返す時、賄い料がもらえたらしく、育成後の牛が天王寺牛町等で売られたのではないかと想像されます。

「有馬郡史」には、年貢米を納める時、米を運んで来た牛が同じ場所に集まり、互いに自分の牛を誇る風が生まれ、藩主も、最も太った牛に賞米一斗を下賜したとあり、この辺りでは、牛に麦を食わせて太らせる習慣があったというのも、入厩の影響かもしれません。

「神戸市史」（1924年）に、神戸ビーフの名が世界に知られるようになったのは、横浜開港によって日本に来た外国人の食す牛肉が輸入だけでは足りず、外国船が神戸で1隻あたり30～40頭の牛を買入れ、横浜に輸送しました。この牛肉がたいそう美味で、これが神戸ビーフとして広まったとあります。「日本食肉文化史」（伊藤記念財団 1991年）にも、その第1便は1865年だったとあります。

この神戸港から横浜に送られた牛が例の麦を食わせて太らせていた有馬近辺の但馬牛だったようです。

「神戸市史」には、以後公然と外国人と牛を取引する博労が現れ、神戸開港後には牛肉料理屋「月下亭」や露店風の牛肉屋もできました。生田川尻にと畜場ができると、需要は更に増え、但馬の有志と連携して養父郡上野村や七美郡大笹村に牧場を設けて増産を図り、これを豊岡県や兵庫県が支援したとも書かれています。

このような神戸ビーフの誕生秘話から、江戸時代の流通ルートや入厩の仕組みが“神戸ビーフブランド”につながったように思えます。

（前県立農林水産技術総合センター所長）